

**KOMATSU**  
Creating value together

# 大地

**Daichi**

2025 Vol.151

よりよき現場の  
未来を創る

ICT建機現場最前線  
藤岡建設株式会社 愛媛県西条市

ICTを企業戦略に位置付け  
地域社会と共に成長する

Gembaディスカバリー

“自動車” マツダ株式会社防府工場 山口県防府市

マツダ防府工場が描く、  
環境と調和する先進のものづくり

“解体” 株式会社大忠 東京都江戸川区

「効率性」「柔軟性」「安全性」を兼ね備えた  
最強の解体2ピースブーム仕様





## Contents

ICT 建機 現場最前線	3
<b>ICTを企業戦略に位置付け 地域社会と共に成長する</b>	
藤岡建設 株式会社 愛媛県西条市	
Gemba ディスカバリー“自動車”	8
<b>マツダ防府工場が描く、 環境と調和する先進のものづくり</b>	
マツダ 株式会社 防府工場 山口県防府市	
Gemba ディスカバリー“解体”	12
<b>「効率性」「柔軟性」「安全性」を兼ね備えた 最強の解体2ピースブーム仕様</b>	
株式会社 大忠 東京都江戸川区	
Daichi Report	16
<b>好きこそものの上手なれ ——メカニックに迫る</b>	
コマツがゆく! Vol.3	18
<b>第9回アフリカ開発会議（TICAD 9）に アフリカで活躍する日本企業としてコマツが出展！</b>	
経営講座	20
<b>21世紀における「勝ち組のための税務経営」</b>	
現場安全講座	22
<b>深礎掘削作業中に ドラグ・ショベルのバケットに指を挟まれる</b>	



表紙の写真：  
ICTで現場をサポートしている  
藤岡建設のPC200i-12

建設現場の未来を創造

## Smart Construction®

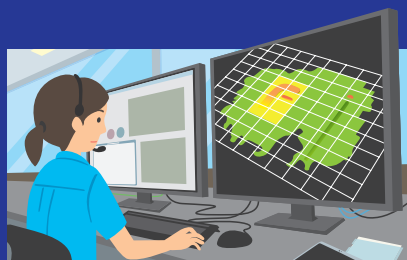
それは、建設生産プロセス全体のあらゆる「モノ」のデータをICTでつなぐことで、測量から検査まで現場のすべてを「見える化」し、安全で生産性の高いスマートでクリーンな未来の現場を創造していくソリューションです。

人手不足解消や安全性の向上など建設現場のさまざまな問題・課題解決に貢献します。

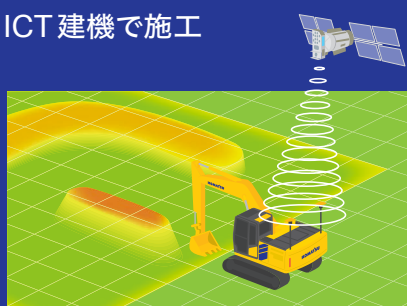
### 1 3次元測量・ドローン撮影



### 2 3次元設計図



### 3 ICT 建機で施工



Smart Construction® サイトへ



藤岡建設株式会社

愛媛県  
西条市



ICT 建機  
現場最前線

## ICTを企業戦略に位置付け 地域社会と共に成長する

地域のインフラ整備に取り組み、地域社会と共に歩んでいる藤岡建設株式会社。その企業の成長戦略においてICTは重要な位置を占める。効率的で安全な現場施工、若手人材の採用と育成、持続可能な社会づくり。同社の多彩な活動のなかに、ICTの可能性が見えてくる。

### 事業の多角化と規模拡大を推進

西日本最高峰の石鎚山と瀬戸内海に面した愛媛県西条市に拠点を構える藤岡建設株式会社。1955年の創業以来、「人と自然そして地球の未来を考える」をテーマに、豊かな暮らしと社会の発展に尽力している。事業は、公共工事を主体とする土木工事をメインに展開。多岐にわたるインフラ整備を手がけ、地域社会の安全と利便性向上に貢献してきた。「しまなみ海道※」などの大型プロジェクトに参画した実績を持つほか、官公庁から数多くの優良工事表彰を受賞し、施工管理能力の高さには定評がある。保有する建機はおおよそ100台にものぼり、その機動力の高さが

同社の強みだ。

代表取締役の藤岡一貴氏は、創業者の意思を継いだ二代目。2000年、40歳の若さで社長に就任して以降、土木事業だけでなく、生コンクリート事業やバイオマス事業、農業事業など、事業の多角化を推進。東京都港区にある、麻布十番たちばな泌尿器科・皮膚科クリニックの相談役顧問も兼務している。「一つのことには頼っていては、何かがあったときに企業として対応できません。多彩な領域をカバーすることで、企業は安定し、成長を続けることができます」と成長の要因を藤岡社長は語る。

※広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ約60kmの道路







藤岡建設株式会社  
代表取締役  
藤岡一貴 氏

## ICTを経営戦略のなかに位置付ける

同社がICTに本格的に乗り出したのは2020年頃だ。背景には、公共工事の分野でICT活用工事の指定が増えたことがあるが、同社がICTに着目したポイントは「若手社員の早期戦力化」だ。ICT施工であれば、経験の浅い若手社員でも、一定水準以上の施工を簡単に行うことができる。若手社員が生き生きと自身の能力を発揮する環境を整えることで、企業全体の活性化や組織の成長につながる。ICTを単なる技術としてではなく、経営視点に立った戦略的投資と考え、ICT導入を図った。

同社では、測量から施工、そして出来形管理・納品に至るまで、業務全体をカバーするICTの一貫体制を整備している。ドローンやレーザースキャナーを活用した3D測量を行い、その後3D設計データを作成し、ICT建機による施工を実施。さらに、3D出来形管理やデータ納品にも対応。ICTを軸とした現場運営が日常的に行われている。「3D設計データの作成など、難しい業務もありますが、教えてもらいながら対応しています」と若手社員たちは語る。

## PC200i-11の性能を最大限に活用

ICT施工を業務全体に取り入れてきた同社では、これまでもPC200i-11を活用し、現場における効率化や省人化、安全性向上といったICTの有効性を最大限に活かした施工を行ってきた。そのうえで、更なる生産性を追求すべく、最新モデルのPC200i-12

を導入した。PC200i-12は、高精度の作業を容易にする最新の3D施工機能や安全サポート機能を標準搭載し、Smart Construction®との直接連携に対応している。施工データの活用性や現場管理との連動性が飛躍的に向上しており、ICT施工における高次の価値をもたらしている。

## ホワイトボードのデジタル化

同社では建機の管理にSmart Construction Whiteboardを活用している。Whiteboardとは、現場の工程・タスク・建機配置などの情報をクラウド上で一元管理し、建機がどの現場で稼働しているかを視覚的に共有できるデジタルツールだ。もともと同社では、本社オフィスのホワイトボードにマグネットを貼り付け、建機の配置状況を管理していたが、PC200i-12導入により、クラウドによるリアルタイムの情報共有が可能なWhiteboardへと移行。これにより、本社と現場間の連携が飛躍的に向上し、効率的な建機運用ができるようになった。

さらに、WhiteboardはKomtraxの情報と連携しているため、それぞれの建機の稼働状況も一目で把握できる。「当社では約100台の建機を保有しています。複数の現場を同時に動かすなかで、どの建機をどこに配置するかは判断は業務効率に直結します。建機の稼働状況が可視化されるため、全体の最適化がしやすくなりました」と工務部課長の宮原直則氏は語る。なおこのWhiteboardは、建設現場のDXを推進する株式会社EARTHBRAINが開発を行ったもので、同社はモニター企業としてその開発に携わった。



ドローンを活用した3D測量で正確かつ効率的な測量を実現



Smart Construction Whiteboardで建機の配置状況を一元管理





藤岡建設株式会社 管理統括  
藤岡優一 氏藤岡建設株式会社 工務部 課長  
宮原直則 氏

## 他の追随を許さない圧倒的な性能で 作業をサポート

PC200i-12は業務効率の向上だけでなく、操作における快適性と安全性の向上にも配慮された設計となっている。運転席の足元スペースは広く確保され、長時間の作業でも疲れにくいエアサスペンションシートを採用。振動を効果的に吸収し、快適な乗り心地を実現している。

さらに、360度機械周囲カメラシステムと衝突検知ブレーキシステムを搭載。機械の周囲全体をリアルタイムで映し出す映像により、死角のない視界が得られ、安全性も格段に向上している。「周囲をすべて見渡せるので、安全面でも安心感があり、精神的な負担もぐんと少なくなりました。操作レバーの感度調整も便利で、動き出しの反応やレバーの重さも自分好みに設定できます」

と宮原課長は話す。

従来の機種から搭載されている、ボタン一つで瞬時に出力を増強するワンタッチパワーアップ機能や、バケット内の土量やダンプへの積載重量をリアルタイムで把握できるペイロード機能の評価も高い。「PC200i-12は高品質で効率的な作業が快適に行えます。この建機に乗ったら、もうほかの建機には乗れません!」とオペレーターはPC200i-12を高く評価する。

## ICT施工推進を目的とした若手人材の採用

ICT施工を継続的に推進していくためには、それを支える人材の確保と育成が不可欠だ。同社では、若手社員の採用と育成にも力を注いでいる。工業高校の生徒に限らず、大学生や専門学生を対象にインターンシップを実施。ドローン測量やICT建機の操作体験を通じて、最先端の建設技術に触れる機会を提供しており、実際にインターンシップを通じて入社を決めた学生も少なくない。

入社後の新人研修にはICT研修を組み込み、座学・操作訓練・実践を通じてICT施工の基礎から現場レベルまでを段階的に学べる体制を整えている。同社では、ICTをあくまでも業務効率化の手段と捉え、土木の基本的な知識や技術をベースに据えた人材育成を行っている。ICTに偏ることなく、実務に根差した土木のスキルを

重視している点も特徴だ。「随時勉強会を実施し、基本となる土木の知識からICT関連の最新技術まで、幅広く社内でも共有することで、これからの社会に通用する人材を育てていきたいと考えています」と管理統括の藤岡優一氏は語る。

## リサイクル事業の起点は「捨てない土木」

多角的な事業展開を行っている同社だが、現在、特に注力しているのが、建設廃材の再資源化を目的としたリサイクル事業だ。そのきっかけとなったのは、コマツの自走式破砕機「ガラパゴス」との出会いだ。もともと循環型の持続可能な社会づくりに関心があった藤岡社長は、当時のガラパゴスのキャッチフレーズとなっていた「捨てない土木」という言葉に心を動かされ、リサイクル事業へ参入した。その後、コマツの環境関連機械を続々と導入。「当社の成長はコマツと共にあると言っても過言ではありません。コマツの建機が進化するたびに、私たちの業務品質も向上し、それに伴って事業の幅も広がってきました」と藤岡社長は語る。

## 地域の守り手として、地域社会と共に歩む

同社は、公共インフラの整備を担う企業として、地域社会とのつながりを何よりも大切にしている。地域の維持管理業務として、ゴミの収集や海岸の清掃作業などにも積極的に取り組んでいる。また、地元の同業者を集めて情報共有の場を設けるなど、地域全

体の建設業界の発展にも寄与している。「私たちは『地域の守り手』としてインフラを整備し、万が一の際には24時間体制を整え、迅速に対応できるよう努めています。雇用を創出し、地域の持続的な成長を支え、安全で快適な社会生活を実現する。これが私たちのミッションです。今後は不動産事業にも力を入れ、大規模開発やまちづくりを通じて、人と人とのつながりを生み出すことで、より広い視野で地域社会に貢献していきたいと考えています」と藤岡社長は語る。地域の人々の暮らしを支えながら、自らの成長を地域の成長と重ね合わせていく。その姿勢こそが、藤岡建設の未来を形づくっている。



レーザースキャナー操作の実地研修でICT施工を支える人材を育成

こちらの二次元コードから  
PC200i-12の動画を  
ご覧いただけます



リサイクルを支える現場の主力機、ガラパゴス BR380JG-3(中央)



# 自動車

マツダ株式会社 防府工場



## マツダ防府工場が描く、 環境と調和する先進のものづくり

革新を続けるグローバルメーカー、マツダ株式会社。  
その国内第2の生産拠点となるマツダ防府工場。  
同工場ではカーボンニュートラルの実現と作業効率向上を目指し、  
リチウムイオンバッテリー搭載の電動式フォークリフトの導入を進めている。  
コマツの技術が『マツダ』の持続可能な社会へとつながる  
先進のものづくりを支えている。



マツダ株式会社  
防府工場 工場長  
松田義博 氏



瀬戸内海を望む広大な敷地に位置する防府工場。国内第2の生産拠点として稼働している

### カーボンニュートラルを目指すマツダ防府工場

広島県府中町に本社を構える自動車メーカー、マツダ株式会社。1920年の創業以来、創意と技術革新を重ね、独自の高い技術とデザインで世界中からの支持を集めている。その一方で、地球環境への配慮を企業の重要な責務と位置付け、製品ライフサイクル全体を通じたCO<sub>2</sub>の排出削減に取り組んでいる。2030年までに国内自社工場と事業所のCO<sub>2</sub>排出を大幅に削減し、2035年に全世界の自社工場でカーボンニュートラルを実現、2050年にはサプライチェーン全体での達成を目標に掲げている。

山口県防府市にある防府工場は広島本社に次ぐ国内第2の生産拠点であり、1981年の稼働開始以来、地域経済の発展にも大きく貢献している。敷地は西浦地区で80万㎡(東京ドームの約1.5倍)、中関地区で50万㎡(東京ドームとほぼ同規模)。2024年度は約35万台の車を製造した。昼夜勤体制で4,500名ほどの従業員が勤務。部品供給などを行う19社のパートナー企業を含めると約1万名が同工場で働いている。

### カーボンニュートラルへ向けたフォークリフトの電動化

パートナー企業からトラックで納品される部品の荷下ろしと、部品や金型の工場内の移動にフォークリフトが活用されている。同工場では、これらの作業に使用する小型フォークリフトとして、液化石油ガス(LPG)を燃料とするエンジン駆動式、鉛バッテリーの電動式、リチウムイオンバッテリーの電動式(FE25G-2、FE30G-2)の3種類が稼働している。「カーボンニュートラルの実現と作業効率の向上を見据え、更新時期を迎える車両から随時リチウムイオンバッテリーの電動式フォークリフトへの置き換えを進めています」と防府工場 工場長の松田義博氏は語る。

### エンジン駆動式、そして鉛バッテリーの課題

かつてはLPGのエンジン駆動式フォークリフトが主力であったが、使い勝手に多くの課題があった。同工場は24時間稼働で、日勤は8時から17時、夜勤は20時から翌5時の2直制となっている。LPGボンベは数時間で燃料を使い切るため、昼夜それぞれの直で交換作業が発生する。満タンに充填されたボンベは約30kgとかなりの重量だ。これを一人のオペレーターが人力で交換するのだから、相当な重労働である。しかも、交換のたびに作業は中断され業務効率に影響を及ぼした。さらにエンジン駆動式特有の振動が多く、オペレーターへの身体的な負担も課題となっていた。

そして、同社のカーボンニュートラル推進に合わせて導入されたのが、鉛バッテリー搭載の電動式フォークリフトだ。しかし、充電に時間がかかるため、LPGと同様、昼夜それぞれの直毎にバッテリーを交換する必要があった。約800kgもの重量となるバッテリーをフォークリフトで入れ替える際は、限られたスペースに収納する繊細な操作が求められ、危険を伴う作業となる。さらに、交換のタイミングが複数台重なってしまうと、待機時間が発生し稼働効率も低下する。鉛バッテリーの電動式フォークリフトは、環境対応の一助にはなったものの、作業環境や効率の面では依然として多くの課題を抱えていた。





プラグを差し込むだけで簡単に完了するFE25G-2の充電作業



部品の搬送や荷下ろしなど、防府工場内のさまざまな工程で活躍しているFE25G-2



防府工場の生産ラインに設置されたコマツ製の大型プレス機。自動車部品の成形に活用されている

### 総合的に高く評価されたリチウムイオンバッテリー

そこで同工場は、CO<sub>2</sub>排出削減と業務効率向上を同時に実現するリチウムイオンバッテリー搭載の電動式フォークリフトの導入を検討した。コマツグループでは、社有車としてマツダ車も採用しており、両社の間には深いパートナーシップが築かれている。その関係を背景に、コマツから提案のあったFE25G-2の導入を検討することになった。実際の導入に先立ち、デモ機による2週間程度の試験運用を実施。その結果、効率性や操作性、運用面など総合的に高い評価を得て、正式導入に至った。

現場で高く評価されているのは、従来のようなLPGボンベ交換や重いバッテリー交換の作業が不要になったことだ。FE25G-2は急速充電が可能であり、充電は一日一回で済む。「日勤と夜勤の間の1～2時間の充電で完了します。しかも、充電はプラグを差し込むだけの簡単な操作です。これまでの煩わしい手間が削減され、安全性も格段に向上しました。精神的にもだいぶ楽になりました」と第4車両製造部 第2組立課 部品係の西村宙氏は語る。

### 高い安全性能と優れた運用管理性能

また、安全性や快適性の面での評価も高い。回生ブレーキがよく効き、アクセルを離すだけでスムーズに減速できるため、安心して作業



マツダ株式会社 防府工場  
第4車両製造部 第2組立課 FB5職場 職員  
中屋正導氏



マツダ株式会社 防府工場  
第4車両製造部 第2組立課 部品係 係長  
西村宙氏



マツダ株式会社 防府工場  
第4車両製造部 第2組立課 部品係 FB5職場 職長  
林卓也氏

ができる。振動が少なく、体への負担が軽減されるのも大きな特長だ。「長時間稼働でも快適に作業できますね。バックライトを搭載しているので、音が静かでも周りの作業員への注意喚起ができ、安全性も確保されています」と第4車両製造部 第2組立課 部品係の林卓也氏は語る。

さらに、運用管理の効率化を支えているのが、稼働時間や位置情報、稼働状況、メンテナンス情報まで確認ができる稼働管理システム「Komtrax」だ。「これまではフォークリフトの稼働状況を正確に把握することが困難でした。しかし、Komtraxを活用することで、稼働率が低い車両を効率的に再配置し、稼働の標準化を図れるようになりました」と第4車両製造部 第2組立課 FB5職場 職員の中屋正導氏は語る。

### リチウムイオンバッテリーへの置き換えを推進

同工場では、FE25G-2、FE30G-2のほか、重量のある金型の移動にはFD240-6を、またプレス用の材料搬送にはFH80-2を用いるなど、作業内容に応じてコマツのフォークリフトを活用している。「コマツの製品は何より信頼性が高い。故障が少なく、耐久性にも優れています。現場を止めることがなく計画どおりに業務を進めることができ、大変助かっています。現在稼働している

LPGや鉛バッテリー式についても、更新時期を見据えて順次リチウムイオンバッテリーの電動式フォークリフトへ置き換えていく予定です」と松田工場長は語る。

### 持続可能な社会に向けたものづくり

同社は、地域社会に根付いた企業として、地元のイベントに積極的に参加し、交流を深めているほか、工場見学の受け入れにも力を入れている。地域の小学校のカリキュラムにも組み込まれており、見学は毎日のように行われ、子どもたちにもものづくりの現場に触れる機会を提供している。見学コースは、自動車完成するまでの工程を約1時間30分でたどる内容なので「大人の社会見学」として訪れる一般客も少なくない。こうした活動を通じ、防府工場は地域に開かれた企業としての存在感を高め、今後も街の発展に寄与していく考えだ。

「当社では『走る喜び』をブランドの本質に据え、その体験を通じて『生きる喜び』へとつなげることを企業のビジョンとしています。今後も、お客さまが求める価値を的確に捉え、『走る喜び』につながるものづくりを進めていきます」と松田工場長は語る。マツダはこれからも地域と共に歩みながら、持続可能な社会に向けたものづくりを進化させていく。



プレス用の材料搬送を担うFH80-2。高出力ながら精密な操作性を備えている



金型などの重量資材を運ぶFD240-6。圧倒的なパワーと高い安定性で、安全かつ確実な作業を実現



# 解体

株式会社大忠



## 「効率性」「柔軟性」 「安全性」を兼ね備えた 最強の解体2ピースブーム仕様

木造住宅を中心に多様な現場を手がける株式会社大忠が選んだのは  
作業範囲を大きく広げ、安全と効率を両立させた

PC78US-11 解体2ピースブーム仕様。

進化した柔軟性と確かな安全性能が、狭小地での解体業務を支える。



株式会社大忠  
代表取締役  
関口剛生 氏

### 木造建築の解体から土木事業までをワンストップ

東京都江戸川区に拠点を構え、首都圏で解体事業を中心に展開している株式会社大忠。1977年に先代が個人事業主として事業を始め、2013年に現代表取締役の関口剛生氏が法人化し、株式会社大忠として設立した。主な事業は木造建築の解体業務だが、鉄骨造やRC造といった建物の解体も幅広く手がけている。また、解体だけでなく造成工事をはじめとする土木工事までを請け負うなど、総合的な事業展開を行っている。「解体から土木工事までを一貫して手がけられる体制を整えており、ワンストップで総合的なサービスを提供できるのが当社の強みです。手間やコストの削減といった付加価値を届けています」と関口社長は語る。

### 経験と優れた技術が実現する高品質な解体業務

同社が手がける現場は、都内の住宅街の一軒家やアパートなど、二階建て木造住宅の解体が中心だ。作業の流れは、足場を組んで養生を施し、近隣への安全対策と粉じんの飛散防止を徹底することから始まる。その後、内装解体に着手し、内装材を丁寧に取り外す。内装材の搬出が終わると、グラップルを装着した油圧ショベルで上屋部分の解体に移る。現場の状況に応じて手作業も併用しながら進めていく。続いて外壁のモルタルをグラップルとバケットを使って取り除く。基礎は大割圧碎機で解体し、小割圧碎機で細かく砕いたうえで、最後にスケルトンバケットで残材を選別・搬出し、現場をきれいに仕上げる。

現場は周囲に建物が迫る狭小地での作業が多く、建機には大きなスペースを必要としない小回り性能が強く求められる。そうした環境に対応するため、同社ではこれまでロングアームのPC78US-8解体仕様を導入し、解体業務を行っていた。その後、同業者より「ブームを分割構造としている2ピースブームは、狭いスペースでの解体作業に更に力を発揮する」との情報を入手。試乗を行ったうえで、その機能性を実感し、PC78US-11解体2ピースブーム仕様を購入した。





後部の張り出しを抑えたコンパクト設計で、狭い現場でもスムーズに旋回できる



### 狭小地でもゆとりある取り回しを実現

2ピースブームとは、通常一本で構成されるブームを二分割し、途中に関節を設けた構造が特徴だ。関節部をシリンダーで操作することでブームの角度を自在に変えられるため、従来に比べ作業範囲の自由度が格段に広がる。旋回時にはブームを折りたためることでコンパクトに旋回でき、その分ロングアーム仕様で必要だった余計なスペースを取らずに済むため、狭い現場でも取り回しが容易になる。さらに、関節を起こすことでより高所までブームを伸ばすことが可能だ。

また、ブームを折り曲げれば足元の掘削や解体にも対応できる。標準仕様では掘削の深さは約3mが限界だったところ、2ピースブーム仕様では約3.5mまで掘削でき、より深い作業にも対応できる。2ピース化によって操作の柔軟性が高まった。「2ピースブームにしたことで、これまで手元作業員が人力でやっていた部分も機械で対応できるようになり、効率上がるだけでなく、作業員の負担軽減や安全性の向上にもつながっています。また、以前は高さを確保するために廃材の上に建機を乗せて作業することもありました。そうすると現場にいつまでもゴミが残り、環境面でも良くなく、危険も伴いました。今では、きれいで安全な作業環境で作業できています」と関口社長は2ピースブームのメリットを語る。

### パワーダウンすることなく騒音・振動対策を推進

こうした作業性の進化に加え、PC78US-11では心臓部となるエンジンの刷新も行われている。エンジンが4気筒から3気筒へと変更された。最新の燃料制御とターボ技術により十分な出力を確保し、燃費性能や応答性を向上。騒音や振動を抑え、静かで快適な作業環境を実現した。「解体業務は住宅街での作業が多いため、騒音対策や振動対策はとても気を遣うポイントです。その点、PC78US-11はとても優れています」と関口社長は語る。

また、安全性の面でも一段と進化を遂げている。代表的なのが周囲監視モニターだ。建機の周囲を3台のカメラで捉え、まるで真上から見下ろしたかのような映像を運転席のモニターに表示する。さらに、カメラ映像をAIで解析し、作業範囲内に人を検知すると警報音やモニター表示で知らせる人検知衝突軽減システムを搭載。オペレーターの視界を補完することで、接触事故のリスクを大幅に低減し、死角を最小限に抑えながら安全な作業をサポートしている。



PC78US-11のエンジンルーム。従来の4気筒から3気筒へ刷新し、燃費と静粛性を高めた



運転席の周囲監視モニター。死角を補い、狭小地でも安心して作業できる

### これ以上ない最強の2ピース解体仕様機

加えて同社の取り組みとして、オペレーターの声を外部に伝えるスピーカーをキャビン外部に設置している。木造二階建て程度の解体現場であれば、この仕組みが特に効果的で、無線機を使用することなく手軽かつ的確に指示を伝えることができる。スピーカーの音量は近隣への騒音に配慮して調整されており、安全面での警告や作業上の指示を現場全体に発信している。

「コンパクトに旋回できて高所にも強い。効率や安全性の面でも本当に頼れる建機です。解体現場で必要とする機能がしっかり詰まっていて、私としてはこれ以上望むものがないくらいです。まさにPC78US-11 解体2ピースブーム仕様は最強の2ピースです」と関口社長は絶賛する。

### 着実に歩みを続け、信頼と実績を築く

解体は、図面や外観だけではわからない部分が多く、実際に壊してみても初めて明らかになることも少なくない。だからこそ経験と

優れた技術が求められる。そして、効率的かつ安全に作業を進めていくには事前に綿密な計画を立てるとともに、状況に応じて臨機応変に対応していく力が求められる。「この仕事は、いつまでも“慣れる”ということがありません。常に初心を忘れずに、すべてにおいて慎重であること。そして、近隣住宅への配慮を徹底すること。そうした姿勢を大切にしながら、私たちはオペレーターと手元作業員との信頼関係を土台に、技術と経験を活かしたチームワークで、社会と共生できる現場づくりを目指します」と関口社長は解体業務への思いを語る。「今後も規模の拡大よりも一つひとつの現場を丁寧に積み重ね、地道に信頼と実績を築いていきたいです。着実に歩みを続け、そのなかで次世代の後継者を育てていくことが目標です」と展望を示す。地に足をつけた取り組みこそが、これからの株式会社大忠の未来を支えていく。

こちらの二次元コードから  
PC78US-11 解体2ピースブーム仕様の  
動画をご覧いただけます





## 好きこそものの上手なれ

「お客さまの稼働を止めない」の実現に向けて一翼を担うメカニックに迫る

柔軟な発想と確かな技術で信頼を築いていく若手メカニック。固定観念にとらわれず、自ら考え、挑み続ける姿は、組織の可能性そのものを映している。人が育ち、チームが変わる——その現場に、持続的な成長のヒントを見いだすべく、東北カンパニー サービス課メカニックチームの工藤莉里氏とサービス事業部サービス技術サポート部の安藤善朗氏に話を聞いた。



### 父から継いだ機械への情熱

私は現在入社2年目で、大きな機械を扱いたいと思っていたため、主に建設機械を担当しています。

自動車整備士であった父の影響もあり、子どものころから機械



東北カンパニー サービス課 メカニックチーム  
工藤莉里 氏

が大好きでメカニックに強い憧れを持っていました。進学の際もメカニックの技術が学べる専門学校を選びました。学校では、基礎的な整備技術を学びながら、実務に必要な資格をできる限り取得しました。ただ、心構えの多くは父から学び、今も変わらず尊敬しています。

### 大きな機械を自分の手で分解して元に戻す達成感

就職活動の際には、「女性なのだから」と乗用車の整備工場等、小型車両を扱う整備会社を勧められたこともありましたが、でも、私は大きな機械に携わりたかったですし、女性という理由で選択肢を狭められることに、悔しさと強い反発心を覚えました。そんななか、父がコマツを勧めてくれたのです。

コマツに入社後、配属された支店では女性メカニックは私だけでした。最初は周りも戸惑っていたように思います。しかし、積極的にコミュニケーションを重ねるうちに“女性メカニック”ではなく、今では一人の技術者として接していただけるようになりました。



先輩メカニックは“やって覚えさせる”タイプで、さまざまな作業に挑戦させてくれるので、毎日がやりがいに満ちています。例えば、KDPF(コマツ ディーゼルパティキュレートフィルター)の交換作業では、多くの部品を分解します。部品が多いほど工程は大変ですが、やり遂げた瞬間の達成感は格別です。コマツでメカニックとして日々大きな機械と向き合えることを、とても誇らしく感じています。



メカニックの業務に当たり必要となる資格の保有実績

### みなさんが「フロー」に働くために

昨今、建設業界全体で人材不足が大きな課題となっています。ITやAIの技術が進化しても、やはり最後は人の力が欠かせません。だからこそ、人材をいかに獲得し、定着させていくかが重要です。

コマツではこれまで、さまざまな人材獲得プロジェクトに取り組んできました。そのなかには、業界としてこれまで十分にアプローチできていなかった“女性メカニック”に関するものもあります。結果として、全国で11名の女性メカニックが誕生し、今も現場で活躍しています。しかし、プロジェクトを通じて明らかになったのは、“性別そのものが課題ではない”ということです。例えば、重いものを持つことが難しい社員がいたとしても、それは性別によって生じる問題ではありません。人にはそれぞれの事情があり、働き方も多様です。つまり、必要なのは特別な配慮ではなく、日常のなかで自然に「手伝ってください」と言える環境です。

「こうであるべき」「こうに違いない」といった先入観にとらわれず、一人ひとりに適切な対応を行うこと。それこそが、性別や年

※掲載内容は2025年10月のインタビュー時のものです。

### 知識や経験は能力値向上アイテム

知識や経験はゲームに例えるなら剣や盾などのステータス・パラメーターを上げるアイテムに当たると考えています。多く持つほど強くなり、自分を支えてくれる。今の私には専門学生時代に取得した資格がアイテムであり、仕事の幅を広げ、自信にもなっています。

同僚のなかには、メカニック一筋で数十年にわたり活躍している方もいます。その方は操縦席のガラスの形だけで型式の違いを見抜き、さらにどの建機も正確に修理できる知識と技術を持っています。私もそんなふうに知識や技術というアイテムを増やし、成長していきたいと思っています。目下の目標はクレーンを装備したトラックで移動して何でもできるようになることです。

### メカニックに縛られず成長を続けたい

メカニックとして機械に触れる仕事を続けたいという思いは変わりません。ですがそれと同時に、将来的には、サービスアドバイザーや支店長として、お客さまにより良い提案ができる立場を目指していきたいと考えています。



右手前が現在、工藤氏が使用している1BOXで左奥がクレーン付きトラック

齢にかかわらず、すべての社員が“フロー”に働ける職場づくりにつながると考えています。これからも社員のために、そして業界全体の発展のために、積極的に変革を進めていきたいと思っています。



サービス事業部 サービス技術サポート部 部長  
安藤善朗 氏





## 第9回アフリカ開発会議(TICAD 9)に アフリカで活躍する日本企業として コマツが出展！

コマツは、2025年8月20日から22日までパシフィコ横浜展示ホールで開催された第9回アフリカ開発会議(TICAD 9)において、自社ブースを出展した。テーマは、イノベーションを通じたアフリカ市場の持続可能な成長への貢献だ。展示の内容について建機マーケティング本部 欧州・アフリカ営業部長 黒川敏夫氏に話を聞いた。



建機マーケティング本部  
欧州・アフリカ営業部長  
黒川敏夫 氏

### アフリカとICT 建機

ICT 施工は、一般的には欧米や日本など工業化国の建設現場で利用されているイメージを持たれることが多いです。しかし、アフリカでも既に多くのICT 建機がインフラ整備で活用されており、コマツの建機にもICT 機能を提供する後付キット装着車が増えてきています。TICAD 開催に当たり、今後更なる市場拡大が見込まれ、注目度も高いアフリカ市場へ、コマツとしてしっかり対応するメッセージを発信したい。社内でも議論した結果、アフリカでは未発売ながら、日本政府がTICADで掲げている「質の高いインフラ」実現に向けて将来的に貢献する機械として、コマツのICT 建機の最先端モデルである新世代油圧ショベルPC200i-12を展示することにしました。ブースの外からでも一目で認識できることが功を奏し、多くの来場者に立ち寄っていただくことができました。

### 最先端建機を扱うための技術

最新鋭の機械が現地にあるだけでは、実際の現場で十分に活用していただくことはできません。その機械を操作できるオペレーターや、管理・修理を担う整備士などの人材を育成することが不可欠です。そのため、コマツグループでは人材育成にも積極的に取り組んでおり、その一例として機械操作シミュレーターやVRトレーニング機器を体験型の実機として展示しています。これらの展示は、実際に来場者の方々に楽しんでいただきました。



ブース内にて機械操作シミュレーション、VRトレーニングを体験している様子

### 始まりは1台のブルドーザー

1963年にブルドーザーを販売したのが、コマツのアフリカにおける第一歩です。それ以降、アフリカ各国でマーケットの開拓を長期にわたり進めてきました。コマツは、建設・鉱山機械の販売に加えて、研修施設への実機やシミュレーターの寄付、トレーニングカリキュラムの提供などを通じ、技術者の育成にも力を入れています。さらに2026年の稼働開始を目標に、西アフリカのお客さま・代理店、さらには地域社会を対象とする建設機械オペレーター・メカニック向けのトレーニング施設をコートジボワールに設立するプロジェクトが始まっています。そこではシミュレーターなどを活用した実践的な研修を提供する予定で、将来的には本体・部品の在庫機能やマーケティング機能を備え、西アフリカの中核拠点となることを目指しています。

### 一足飛びに成長するアフリカ市場

既にICT 建機を用いていると前述しましたが、アフリカは工業化国が歩んできた段階的な成長過程とは異なり、一足飛びにICT 建機などの最新技術を取り入れて発展していくと考えられます。コマツの売上げに占めるアフリカ地域の割合はまだ大きくありません。しかし、アフリカの豊富な資源や人口増加に伴う鉱山・インフラ開発を背景に経済成長が期待されます。そのため、建設・鉱山機械の需要拡大が見込まれ、コマツはアフリカを新中期経営計画(2025～2027)の重点地域の一つと位置付けています。

アフリカ市場ではコマツの建機は高価格帯にあります。しかし、その価値に見合う品質と多様なサポートを提供していると自負しており、実際にコマツ建機や手厚いサポートは国境を越えて喜ばれ、信頼につながっていると感じています。この信頼に応え続け、アフリカ諸国と共に、より大きく発展していきたいと考えています。



### 第9回アフリカ開発会議(TICAD 9)

アフリカの開発と繁栄を主題とする国際会議(TICAD)は、1993年以降、日本政府が主導し、国連、国連開発計画(UNDP)、世界銀行、アフリカ連合委員会(AUC)と共同で開催され、アフリカ各国や日本政府の首脳級をはじめとする要人や関係者が参加している。2008年の第4回、2013年の第5回、2019年の第7回が横浜で開催され、今回のTICAD 9は4回目の横浜開催となった。



## 21世紀における 「勝ち組のための税務経営」

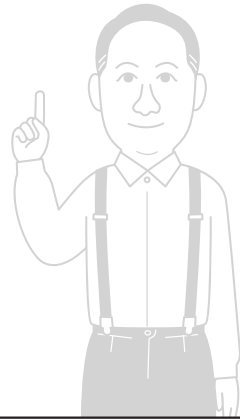
公認会計士・税理士・行政書士  
城所弘明  
1980年に「城所会計事務所」設立。  
1993年から、コマツの「コマツ経営ト  
ップセミナー」専任担当講師や「ビジネス  
会計人クラブ」会計顧問、日本商工  
会議所税制専門委員会学識委員などを  
務める。

【はじめに】

こんにちは、『大地』の読者の皆さま、お元気ですか？

最近、日本企業を取り巻く環境は、これまでにないスピードで変化しています。国際情勢の緊張、円安や資源高、デジタル化の急速な進展など、経営を取り巻く外部環境は大きく揺れ動いています。さらに、少子高齢化に伴う人手不足、熟練社員の高齢化、そして事業承継問題など、多くの経営者が頭を悩ませているのではないのでしょうか。

こうした状況のなかで、「自社が今後も生き残り、更に成長していくためには、どのような経営をすればよいのか」。今回は、その答えのヒントとなる「勝ち組のための経営戦略3カ条」をお届けします。



### 勝ち組のための経営戦略3カ条

## 1 「ヒト」を大切に作る経営戦略

企業の成長には、優れた設備や技術と、それを活かす社員の力の両方が欠かせません。設備や機械があっても、それを最大限に活かすのは社員一人ひとりの力です。だからこそ、会社にとって最も大切な財産は「ヒト」と言えます。「若手の採用が難しい」と悩む経営者は多いですが、それ以上に重要なのは、今いる社員を大切にし、長く働いてもらうことです。社員を大切にすることは、単に給料を上げることではありません。社員が働きやすく、成長し、安心して働ける環境を整えることが大切です。例えば次のような取り組みが考えられます。

- 働きやすい職場環境を整える（暑さ・寒さ対策、休憩所の充実など）
- 社員の成長を支援する（資格取得支援、社内勉強会など）
- 安心して働ける体制をつくる（健康管理や再雇用制度の整備など）

私が「この会社はいいな」と感じる企業は、例外なく明るく前向きな雰囲気があります。社員同士の会話がが多く、経営陣と社員が同じ方向を向いているのです。その第一歩としておすすめなのが、社内イベントの活用です。慰安旅行や花見、バーベキュー、忘年会など、交流の機会を設けることで、社内の雰囲気がぐっと良くなります。こうした「小さな楽しみ」が、社員のやる気と定着率を高め、結果的に生産性の向上にもつながります。



## 2 設備力で差別化する経営戦略

戦国武将の織田信長は、時代に先駆けて「鉄砲」を取り入れ、戦の常識を覆しました。当時、騎馬戦にたけた武田軍に対し、信長は鉄砲隊を組織し、戦略的な運用によって勝利を収めたのです。これは現代の経営にも通じます。つまり、「社員のやる気×最新の設備（技術力）」があれば、強敵にも打ち勝つことができるということです。近年では、ICT施工技術の進歩により、若手社員でも熟練工に匹敵する作業精度を発揮できるようになっています。

また、電動化・省力化・安全性の高い機械を導入することで、作業負担の軽減や労災リスクの低減にもつながります。さらに、こうした設備投資を後押しするために、各種の補助金制度や優遇税制も用意されています。「人手が足りないからできない」と悩む前に、“機械化できることは機械に任せる”という発想を持つことも大切です。それこそが、これからの時代に強い企業をつくるための基本と言えるでしょう。

## 3 高度な情報を活用する経営戦略

昔から「情報を制する者は戦を制す」と言われます。しかし、信頼できる情報を手に入れるには、時間や費用がかかるのも事実です。だからこそ、信頼性の高い企業や専門家が提供する情報を上手に活用することが重要です。コマツでは、『戦略経営ガイドブック』や情報誌『大地』などを通じて、経営に役立つ最新情報を発信しています。また、コマツカスタマーサポートのホームページでは、毎月、経営・税務等に関する有用な情報を無料で公開しています。こうした情報を積極的に取り入れることで、補助金の活用や税制改正への対応がスムーズになり、より先を見据えた経営判断が可能になります。

### 【緊急告知】令和8年3月31日までの特例措置に注目

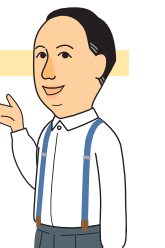
最後に、経営者の皆さまにはぜひ知っておいていただきたい税務上の重要な特例を2つご紹介します。どちらも期限は令和8年3月31日までです。

## 1 少額減価償却資産の特例

30万円未満の減価償却資産を購入した場合、合計300万円まで即時償却（全額損金算入）ができる特例です。この特例は令和8年3月31日で期限を迎えます。それまでに購入・使用を開始したものは対象になりますので、設備更新を検討中の方は期日前の導入をおすすめします。

## 2 事業承継税制の「特例承継計画」の提出

事業承継税制の特例措置は令和9年12月31日まで適用されますが、これを活用するためには、令和8年3月31日までに「特例承継計画」を都道府県知事へ提出する必要があります。提出を忘れると、特例措置を受けられなくなるため、顧問税理士と十分に相談のうえ、早めに手続きを進めてください。



【キド先生の一言】

コマツでは、お客さまの経営に役立つ実践的な情報を日々お届けしています。『戦略経営ガイドブック』や『大地』はもちろん、セミナーやホームページを通じ、税務・補助金・経営戦略など幅広いテーマをサポートしています。ご質問やご要望がございましたら、ぜひお近くのコマツ担当社員までお気軽にお知らせください。皆さまの企業が、次の時代の“勝ち組”として飛躍されることを心より願っております。

【文責：コマツ専任担当講師 公認会計士・税理士・行政書士 城所弘明】

コマツカスタマーサポートのホームページでは、経営に役立つ税務情報を毎月更新しています。ぜひご覧ください。

ホームページはこちらから <https://kcsj.komatsu/recommended/business/>



※掲載内容は2025年10月時点のものです。



## 災害事例に学ぶ 現場仕事の安全対策



今回の  
テーマ

### 深礎掘削作業中に ドラグ・ショベルのバケットに指を挟まれる

被災者：普通作業員 技能実習生      被災の程度：不休

#### 災害発生状況

小型ドラグ・ショベルで深礎掘削作業中、少し残った土砂を大型土嚢袋に入れるため、作業員が土嚢袋の片方の吊り帯をホッパー端に固定した後、もう片方を両手で支えていたところ、運転者がバケットを返したときに、その作業員はバケットとライナープレートの上に指を挟まれた。



#### 原因

- 狭い場所で、ドラグ・ショベルと作業員が混在する作業となっていた。
- 大型土嚢袋使用は予定外作業であった。

#### 対策

- 作業手順を見直し、狭い坑内で建設機械による掘削時には運転者以外立入禁止とする。
- 掘削土砂の搬出は、ホッパーのみを使用するルールとする。



イージーメンテナンスバッテリー搭載

# FE25/30-2

Electric forklift truck

**KOMATSU**  
Creating value together



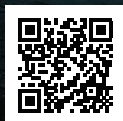
未来の現場に、2つのこたえ。



リチウムイオンバッテリー搭載

# FE25G/30G-2

Electric forklift truck



◀ FE特設サイトはこちら

**大地**  
よりよい現場の未来を創る

2025 Vol.151

発行: **コマツ** 建機マーケティング本部 国内販売本部  
コマツカスタマーサポート 建機・リフト事業部  
〒108-0072 東京都港区白金1-17-3 NBF プラチナタワー

Web 版大地はこちら

